

## 研究主題「一人一人のよさを生かし、協働的に課題解決を図る指導の工夫

### ーボール運動系『ゴール型（ゲーム）』の学習を通してー」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課  
杉並区立桃井第三小学校 主任教諭 石原 朋之

#### 第1 研究のねらい

小学校体育科のボール運動系は、児童同士の関わりを深め、集団のまとまりを高めるのに効果的で、児童の関心も高い領域である。この領域の学習を充実させ、児童に運動の楽しさや喜びを十分に味わわせることが、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎となる。

小学校学習指導要領（平成20年3月告示）体育のボール運動系では、「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」が示され、易しいゲームや簡易化されたゲームの教材が開発されたことで、児童が運動に意欲的に取り組むことができるようになってきている。一方で、ゲームを行うことが目的となってしまう、習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えることに課題があることが指摘されている。学びを深いものにし、確かな学力を育むには、取り上げるゲームの特性を基に、児童に身に付けさせたい力を明確にし、ゲーム領域からボール運動領域へと系統性を踏まえ、段階を踏んで指導する必要がある。

また、「集団」対「集団」で行うボール運動系のゲームでは、活躍できる児童が一部に偏っていることや、ボール操作が苦手な児童が参加できずにいることなどの状況がある。全ての児童がすすんでゲームに取り組み、協働的に課題解決を図るためには、友達のよさを伝えたり、認めたりすることで、友達や自分のよさをチームに生かす学習を展開することが必要である。

#### 第2 研究仮説

ボール運動系「ゴール型（ゲーム）」において、系統性を踏まえ、作戦を立てる上での視点を明確にした指導を工夫すれば、児童が一人一人のよさを生かし、協働的に課題を見付け、解決できるだろう。

#### 第3 研究の内容と方法

##### 1 基礎研究

##### (1) 児童の心身の発達特性及びボール運動系の特性の分析

ボール運動系で挙げられるよさとして、表出しやすい「技能面」のよさだけでなく「態度面」や「思考・判断面」のよさも積極的に見付けて伝えたり、認めたりしていくことで、育成すべき資質・能力の向上につながると捉えた。

##### (2) ボール運動系で育成すべき三つの資質・能力から身に付けさせたい力について

「技能」は、型ごとに特有の技能があること。「思考・判断」は、型ごとのゲームの構造から、順序性や重点とすることに差があること。「態度」は、どの型でも共通して育むべきものがあり、学びの土台となるものと捉えた。

##### 2 調査研究

##### (1) 調査の概要（平成29年7月に児童・教師共に質問紙法【4件法】で実施）

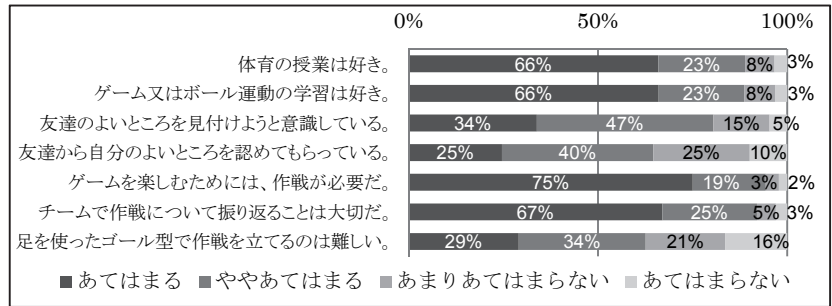
所属校及び都内公立小学校11校の第5学年及び第6学年（昨年度、ゲーム領域又はボール運動領域を経験した学年）1,583名の児童を対象に、ゴール型（ゲーム）についてのアンケート調査を行い、自己や友達のよさに対する意識及びチームや作戦に関する意識等を明らかにした。

また、所属校及び都内公立小学校 11 校の 139 名の教師を対象にアンケート調査を行い、ゴール型（ゲーム）の指導の難しさ及び課題や現状等について明らかにした。

## (2) 児童向けの調査結果

体育の授業及びボール運動系の学習を 90% 近くの児童が好む傾向にあることが明らかとなった。友達のよさを見付けようという意識は 81% と高い反面、友達からよさを認められている

図 1 第 5 学年及び第 6 学年児童のゴール型（ゲーム）における意識



と感じている児童は 65% であった（図 1）。このことから、学習の中で友達のよさを的確に伝えたり、肯定的に認めたりする活動を取り入れることを重視する必要があると考えた。

「作戦の必要性」や「作戦の振り返りの必要性」を問う意識調査について 94% の児童が作戦の必要性を感じている。また、92% の児童が作戦の振り返りの必要性を感じている一方で、63% の児童が足を使ったゴール型で作戦を立てることに難しさを感じている。このことから、作戦に対する指導の視点を明確にし、児童一人一人のよさをチームに生かしながら、協働的に課題解決が図られる足を使ったゴール型の指導計画を立案する必要があると考えた。

## (3) 教師向けの調査結果

「一人一人が活躍するゲームができていないか」という問いに対して、「できていない」と答えた教員が 60% に留まる現状から、指導の難しさが明らかになった。このことから、集団対集団で行うゲームだからこそ、チームを構成する一人一人のよさを価値付ける言葉掛けやつまずきのある児童に配慮した指導が必要になると考えた。ゲーム領域とボール運動領域の特性や指導内容の違いが、「分からない」、又は「正しく認識していない」と答えた教師が 70% に上った。このことから、系統性を踏まえ、段階を踏んで指導することに課題があることが明らかとなった。

## 3 開発研究

### (1) 一人一人のよさを生かし、作戦に結び付ける指導の工夫

児童の発達の段階に応じて、一人一人のよさを見付けて伝え合うことができるよう、第 4 学年において、単元前半では、チームの中でペアを組んでよさを見付けて伝え合い、後半では、そのよさをチーム全体でも共有するようにした。第 5 学年においては、記録カードを用いてチーム全員のよさを見付け、伝え合いながら、チームの特徴をつかんでいくことができるよう、ゲーム領域とボール運動領域の特性を踏まえ、段階的な指導を行った。

### (2) 作戦を立てる上での視点を明確にした指導の工夫

作戦とは、ゲームを行う際のチームの方針、約束事である。チームの特徴に応じた作戦とは、「ボール操作」、「動き方」、「役割分担」の視点（表 1）を踏まえ、一人一人のよさを生かして立てられた作戦のことであると考えた。チームの特徴とは、一人一人のよさの集まりであり、一人一人のよさとは、勝利や得点に向けて貢献できることと捉えた。

教師が「作戦」に焦点を当てた学習指導を工夫することにより、児童が勝利や得点に貢献できることを考え、試行錯誤する中で、全ての児童がゲームの中で攻防することの楽しさをこれまで以上に味わうことができると考えた。

表1 「チームの特徴に応じた作戦」の考え方

	第4学年 ゲーム ゴール型ゲーム	第5学年 ボール運動 ゴール型	共通する教師による 指導的助言の例
作戦を構成する視点	ボール操作、動き方	ボール操作、動き方、役割分担	
ボール操作	パス、ドリブル、シュート等	パス、ドリブル、シュート、トラップ等	
動き方	ボールを持たないときの動き	ボールを持たないときの動き、体の向きや移動の方向性	
役割分担		位置取り（フォーメーション、ポジション等）等	個人の体格や身体能力、運動経験の <b>特徴（よさ）は生かされているかな。</b>

(3) 一人一人のよさを価値付ける言葉掛けと予想されるつまずきに対する言葉掛けの例

一人一人の具体的なよさについて、ボール運動系で育てたい技能、態度、思考・判断の三つの観点から示した。その中で、よさを見つけて価値付ける視点を明確にするとともに、よさを価値付ける言葉掛けと予想されるつまずきに対する言葉掛けの例を作成した（表2）。

表2 一人一人のよさを価値付ける言葉掛けと予想されるつまずきに対する言葉掛けの例 ※一部抜粋

観点	視点	具体的なよさ (身に付けさせたい力)	【称賛的助言】 ※言葉掛けの際には必ず名前を呼ぶ	予想されるつまずき	【指導的助言】
技能	ボールを持っているとき	コート全体を見渡すことができる。	コート全体が見えていて、いいね。	ボールに密集してしまう。	まず、顔を上げてみよう。空いている所はないかな。
		ボールを持ったときにゴールに体を向けることができる。	ゴールの位置を意識して体の向きを変えていて素晴らしい。	体の方向がボールを持ったときのままである。	ゴールの位置を意識してみよう。
		正確なパスを出すことができる。	味方が受けやすいナイスパスだね。	ボールだけに意識がいきってしまい、正確なパスを出すことができない。	周りを見てみよう。仲間の声のする方を意識しよう。

4 検証授業（平成29年10・11月実施）

都内公立小学校で第4学年ゲーム領域ゴール型ゲーム「フットサル」（全7時間）と第5学年ボール運動領域ゴール型「サッカー」（全8時間）の検証授業を実施した。

(1) 一人一人のよさを生かし、作戦に結び付ける指導の工夫の有効性

授業の目標の達成状況を児童に問う形成的授業評価（3件法）を毎回の授業後に行った。学習の自発性を問う「学び方」の観点において単元を通して向上が見られた。

第4学年ゲーム領域ゴール型ゲーム「フットサル」では、特にチームの中でペアを組んでよさを見付ける活動を取り入れた第3時の向上が顕著であった。また、第5学年ボール運動領域ゴール型「サッカー」では、特にゲーム中の一人一人のよさを見付ける「記録カード」を取り入れた第4時の向上が顕著であった。以上のことから、ペアを組んでよさを見付ける活動や記録カードは、一人一人のよさを見付け、作戦に結び付けるために有効であったと考える。

表3 第4学年 毎時間の研究対象チームの作戦と研究対象児童の個人のめあての変遷

時間	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
チームの作戦	自分のボールになったときは、全員で <u>ボールを運ぶ。</u>	<u>攻めと守りの切り替え</u> を早くする。	キーパー以外は <u>パス攻撃</u>	<u>パスをつなげてシュートする。</u>	キーパーをA⇒B⇒C⇒Aの順で交代する。	全員が点数を取るように、 <u>パスしやすいところに行く。</u>
個人のめあて	なるべく相手のボールにせず、 <u>パスをうまくする。</u>	<u>自分からボールを取ってシュートする。</u>	他の人にも <u>しっかりパスし、シュートする。</u>	相手のいない所に <u>パスをつなげる。</u>	チームの人がボールを持ったら、 <u>すぐパスができる所に行く。</u>	たくさん <u>パスをつなぐ。空いている所を見付けて動く。</u>

(2) 作戦を立てる上での視点を明確にした指導の工夫の有効性

第4学年においては、24人中22人が単元を通して作戦の視点に関する記述が見られた。研究対象チームの児童による毎時間の作戦と個人のめあての変遷から、視点としていた「ボール操作」、「動き方」の二つの視点が作戦や個人のめあての中に記述されていた（表3）。

第5学年においては、25人全員が単元を通して作戦の視点に関する記述が見られた。研究対象チームの児童による毎時間の作戦と個人のめあての変遷から、「ボール操作」、「動き方」、「役割分担」の三つの視点が作戦や個人のめあての中に記述されていたこととともに、授業記録の映像分析からもめあての達成に向けて課題を解決しようとする状況が認められた(表4)。

表4 第5学年 毎時間の研究対象チームの作戦と研究対象児童の個人のめあての変遷

時間	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
チームの作戦	マークのときは相手の後ろに付く。ボールを奪ったらパスをする。	前に相手のマークについてボールを奪い攻めにいく。	パスを有効に使う。	相手が攻めたらできるだけゴールの近くにいる。	ボールを持っている人、点をよく入れる人の近くに常に仲間がいる。	スローインで全員がボールを受けやすい所に動く。	敵が来たときに、仲間がパスできる所に移動する。
個人のめあて	自分から相手のいない位置に動く。	決めた位置をなるべくこわさない。マークを前につく。	声をかけてパスをする。	できるだけ前でゴールを守る。	ゴールの近くでボールをもらう。	声を出しながらパスをもらう。(スローインで)	パスできる場所にいく。

運動有能感に関する調査で、チームでの課題達成のための方法の理解や見通しの変化を見取る「統制感」の項目を単元前後で比較したところ、いずれの項目も増加した(表5)。

表5 運動有能感に関する調査(統制感の項目) ※単位(人)

統制感の項目		少し難しい課題でも、個人やチームで努力すればできる。		できない運動でも、諦めないで練習すればできる。		個人やチームで練習をすれば、必ず技術や記録は伸びる。		個人やチームで努力すれば、大抵の運動は上手にできる。	
学年	時間	単元前	単元後	単元前	単元後	単元前	単元後	単元前	単元後
第4学年	よくあてはまる	10	12	12	15	11	16	12	14
第5学年	よくあてはまる	12	15	13	16	16	18	13	14

### (3) 一人一人のよさを価値付ける言葉掛けと予想されるつまずきに対する言葉掛けの有効性

毎時間、単元指導計画の評価の重点に合わせて、一人一人のよさを価値付ける称賛や励ましの言葉掛けを意識的に行った。また、ボール運動系が苦手な児童やつまずきのある児童には、プレーが止まったときや、振り返りの際に言葉掛けを行い、具体的な指導を行った。

運動有能感に関する児童の意識調査の中で、指導者の承認や受容の感受である「受容感」における項目が、第4学年及び第5学年いずれの学年においても単元を通して高まった(表6)。

また、単元前に「ボール運動系の学習が苦手」と回答していた児童は4人であったが、単元を通して積極的に言葉掛けを行い、指導した結果、単元後には「苦手」と回答した児童はいなかった。

表6 運動有能感に関する調査 ※単位(人)

受容感の項目	ボール運動(ゲーム)で、運動しているとき、先生が励ましてくれます。			
	第4学年		第5学年	
	単元前	単元後	単元前	単元後
よくあてはまる	6	12	8	15

## 第4 研究の成果

ボール運動系「ゴール型(ゲーム)」において、系統性を踏まえ、児童の発達段階に応じた作戦を立てる上での視点を明確にした指導を工夫したことで、児童が一人一人のよさを生かし、協働的に課題を見付け、チームとしての課題解決に向けた活動を行うことができた。さらに、「ボール操作」、「動き方」、「役割分担」の三つの視点から作戦を捉えることで、児童への言葉掛けが明確になり、ボール運動系における児童の立てる作戦がより具体的になった。

## 第5 今後の課題

作戦を捉える三つの視点を生かし、第5学年から第6学年、中学校「球技」への系統性を意識した指導と評価の在り方を検討する必要がある。また、教師が一人一人のよさを価値付ける言葉掛けとともに、児童同士の対話から、よさを価値付ける言葉の分析をして、児童への言葉掛け例を作成する。